

国際卓越研究大学の認定等に関する有識者会議（アドバイザーボード）
における審査の状況について

令和7年12月18日
国際卓越研究大学の認定等に関する有識者会議
（アドバイザーボード）

国際卓越研究大学の認定等に関する有識者会議（アドバイザーボード）は、大学ファンドの支援対象となる国際卓越研究大学の認定及び国際卓越研究大学研究等体制強化計画（以下「体制強化計画」という。）の認可のプロセスにおいて、書面審査や国内外のレビュアーの意見に加え、大学側との丁寧な対話を実施する方針のもと、今般の公募で申請のあった8大学に対して面接審査を実施し、さらに申請内容に関する取組状況等を確認するため、6大学の現地視察を実施した。これらの審査も踏まえ、アドバイザーボードとして総括的に審議を行った上で至った結論として、アドバイザーボードにおける審査の観点及び各大学への意見を本文書において報告する。

1. 結論

東京科学大学については、令和8年4月から体制強化計画を開始する。その上で、通常のマイルストーン評価に加え、計画初年度内及び3年度内に厳格なモニタリング（評価結果を踏まえ、支援継続の可否や支援額の見直しの判断もあり得る。）や助言を実施することが適当と判断した。

京都大学については、認定候補として、最長で1年間、体制強化計画案の磨き上げを実施した上で計画を開始することが適当と判断した。

加えて、東京大学については、認定候補とすべきかの判断に当たり、更に確認を要する点があるとの判断に至ったため、最長で1年間、アドバイザーボードとしての審査を継続することとした。

2. 総論

(1) 審査の概要

- ✓ 今回の申請においては、8大学からそれぞれに意欲的な提案がされた。まずアドバイザーボードとしては、これだけの大学が現状を変革しようとする強い意志を示すとともに、初回公募の審査終了時に提示した「次回公募への期待」等を踏まえ、更に深く検討された意欲的な改革案が各大学で創出されたことを評価したい。
- ✓ 国際卓越研究大学の選定に当たっては、国際卓越研究大学の研究及び研究成果の活用のための体制の強化に関する法律に基づく基本方針（以下「基本方針」という。）を踏まえ、これまでの実績や現時点の水準のみで判断するのではなく、提示された世界最高水準の研究大学の実現に向けた変革への意思（ビジョン）とコミットメントに基づき、審査を実施した。
- ✓ また、制度の趣旨及び審査における大学の負担も考慮し、国際卓越研究大学の認定と体制強化計画の認可の審査を、以下の観点から一体的に行った。
 - ①国際的に卓越した研究成果を創出できる研究力
 - ②実効性が高く、意欲的な事業・財務戦略
 - ③自律と責任のあるガバナンス体制
- ✓ 国際卓越研究大学は、人材・知・資金の好循環を生み出すことができるよう、価値創造や社会課題解決に資する研究基盤への投資だけでなく、大学の持続的成長に向けて、自然科学のみならず人文・社会科学を含め、長期的視野に立った新たな学問分野や若手研究者への投資など、すぐには成果につながらない次世代の知・人材の創出にも取り組むことが求められている。アドバイザーボードにおいては、書面や面接による審査だけでなく、研究現場の視察や大学側との丁寧な対話も行い、総合的に判断した。

(2) 申請内容に対する審査の主な観点

- ✓ 基本方針は、体制強化計画において、目指すべき姿の実現に向けて、世界の学術研究ネットワークを牽引し、新たな研究領域やイノベーションを常に創出し続けるマネジメント・システムを構築するため、既存の制度に縛られず、学内外の叡智を結集して取組を進めていくことを求めている。審査に当たっては、国際卓越研究大学は、我が国の大学改革を先導していく役割が期待されており、また選定される大学の変革に向けた取組が他大学へのメッセージとなり、模範となっていく点にも留意した。
- ✓ 具体的には、共通する論点として、各大学の申請内容を踏まえ、以下の13項目を挙げ、面接審査等で今後の計画や取組内容を確認した。
 - ① 国際頭脳循環のハブとなるような、国際的に開かれた大学となっているか。自らの機能拡張のみならず、全国の多様な研究大学等との連携の強化など、我が国の学術研究ネットワーク全体を牽引する計画であるか。
 - ② 課題分析等を踏まえ、最も重要なコアとなる目標や戦略と、それらを実現するための方策が明確化され、実現可能性が精緻に検討されているか。
 - ③ 計画の立案過程において、学内の多様な構成員や連携機関等との間で十分な議

論を経て合意形成された、全学的な構想となっているか。初回公募時から取組が進捗しているか。

- ④ 海外トップレベル研究大学と差別化し、国際的な人材獲得競争の中でリーディングクラスの研究大学となることができる構想か。特色や研究分野の強み等、大学のポテンシャルを活かした構想か。
- ⑤ 国際的な情勢も踏まえ、帯同家族のサポートや自治体等との連携等を含め、世界中からトップレベル研究者や将来有望な若手研究者を獲得するための戦略が具体化されているか。
- ⑥ 大学院教育の在り方や、研究活動に必要な施設設備の整備、分野特性等も考慮した全学的な評価の仕組みの構築など、優秀な若手研究者の育成に向けた戦略が具体化されているか。PI (Principal Investigator) や研究グループ等の運営について、法人の責任としてモニタリング・支援する体制が検討されているか。
- ⑦ 研究者や研究支援人材、事務職員等について、評価の指標や体制が整理され、それらの指標・体制への移行プロセスが具体化されているか。URA 等の研究マネジメント人材や技術職員、ファンドレイザー、スタートアップ育成等の専門職人材の確保に際し、人材も限られ、国際的に獲得競争も激化する中、実現に向けた実効性のある方策が示されているか。
- ⑧ 産学連携等の研究成果の活用に係るこれまでの実績や課題を十分に分析・認識した上で、従来の延長線上にとどまらない戦略により、グローバルな産学連携等の視点も含め、次代の社会構造への転換を見据えた大胆なビジョンを描き、今後の経済成長の起爆剤となるようなイノベーション・エコシステムの中核的役割を果たすことが見込まれる計画か。
- ⑨ 大学発スタートアップの起業支援に加え、事業化・収益化に繋がりステージアップし続けるための具体的な成長支援方策が、これまでの課題を踏まえた上で計画されているか。
- ⑩ リスク要因が生じた場合でも計画が履行できるよう、適切なリスク評価とリスク軽減策を予め包含した持続可能な計画となっているか。
- ⑪ 人事・資金等のリソース配分や学生の配属、組織のスクラップアンドビルドによる新陳代謝等について、意思決定プロセスや権限・責任が明確化され、十分に実行性を担保する仕組みが構築されているか。既存の組織構造にどのようなシステム改革を実施し、「縦割り」等の課題に対応するのかが、規模感やスピード感と併せて明確化されているか。
- ⑫ 様々なデータを活用した評価に基づく戦略的な資源配分など、エビデンスベースな経営変革が計画されているか。その実現に必要なデータ分析を可能とするシステムの構築や、データを利活用する専門的な人材の確保に向け、方策が示されているか。
- ⑬ 長期的な変革を成し遂げるため、将来的に大学運営を主導するリーダーを育成・評価する仕組みの構築や、組織を支える体制の具体的な構築など、強力かつ持続可能なリーダーシップを実現する方策が示されているか。

3. 各大学の申請概要、申請内容に対するアドバイザーリーボード意見

全申請大学において、申請に多大な労力を費やすとともに、学内合意を得て改革に取り組み始めた意欲や挑戦を、アドバイザーリーボードとして後押しするためにも、初回公募時と同様に、各大学の申請の概要とともに個別の意見を以下に公表することとした。
※④以降は申請受付順。

①東京科学大学

【申請の概要】

- ✓ 東京科学大学は、大学統合のモメンタムを活かした全学改革により医工連携を含む異分野融合のビジョン駆動型研究・教育体制へ迅速に転換し、世界最高水準の研究・教育を実現する。世界に開かれた大学としてパートナーとエコシステムを共創し、科学の力による課題解決を通して社会的インパクトを生み、善き未来を創造する。

【意見】

- ✓ 研究分野・組織等の壁を越える抜本的改革を目指し、大学統合のモメンタムも活かして執行部のリーダーシップのもと全学的に検討された計画であるとともに、研究・教育体制の抜本的な改革に向けたビジョンが大学全体で共有されている点について高く評価できる。構成員の総力を結集するとともに、データ共有を含めあらゆる側面で大学統合の効果を更に発揮させ、大学ファンドの助成金も活用し迅速な改革を実現することで、医工融合を推進力として世界トップレベルの新たな研究大学モデルが創出されることを期待したい。
- ✓ ディシプリン横断型の研究教育組織である「Visionary Initiative (VI)」の導入により大学統合によるシナジーを更に高めることが期待されるが、VI の戦略的な実施にあたっては、外部からの資金調達等の財務基盤の継続性を確立するとともに、これまで日本の産業構造を背景として産業界からのニーズも踏まえ、高度な人材を輩出してきた大学の特色も活かしながら進めることを期待する。そのため、VI の実施や関連する大学運営については、アドバイザーリーボードとの対話も進めながら、実効性をもって計画を進めることを強く期待する。
- ✓ また、CFO の下、執行部の事業・財務戦略の意思決定の考え方や、保有する土地の活用、VI の導入を通じた産学連携の推進、寄付金獲得体制の強化、海外のディープテックエコシステムとの連携など計画の詳細が明確である点が確認できた。計画の履行にあたり、教員への給与・報酬の設定など必要となる具体的な制度設計を行い、計画を実施することを期待する。
- ✓ 大学統合を背景に医工連携の強力な推進を掲げた計画であり、日本の新しい大学のモデルとなることが期待される。特に、臨床と研究に携わる時間の管理などを含めた臨床系教員の研究時間確保策については野心的な計画であり、着実に実現できるよう、執行部のリーダーシップのもとで、工夫しながら進める必要がある。また、医歯学分野の強みを活かし、医療ビッグデータの利活用等を目指す意欲的な試みを実現していくことを強く期待する。
- ✓ 上述の下線の事項については関連する KPI が既に体制強化計画上に設定されているため、令和8年4月からの体制強化計画の開始以降に進捗を確認すべき事項として、

通常のマイルストーン評価に加え、計画初年度内及び3年度内に、アドバイザリーボードとして厳格なモニタリング（評価結果を踏まえ、支援継続の可否や支援額の見直しの判断もあり得る。）や助言を実施することで、計画の確実な実行を促すことが適当である。その際、具体的な制度設計を行うとしている教員への給与・報酬の設定の状況についても、併せて確認する。

②京都大学

【申請の概要】

- ✓ 新たな研究組織体制（デパートメント制）の導入を核として「研究改革」「教育改革」「成長戦略」「経営改革」を戦略的に実行し、大学を変革する。創立以来堅持してきた自由の学風のもとで、社会を変革する価値とグローバルに活躍する高度人材を生み出し続け、世界から多様な研究人材が集う国際的な知の拠点を目指す。

【意見】

- ✓ 研究成果の潜在的な価値を探索し、社会展開につなげるシームレスな仕組みや、大学組織として出資法人や海外拠点も活用し、海外大学・海外ファンドとの連携体制や国際性を支える支援環境を構築し、世界レベルのスタートアップ企業創出につなげる意欲的な計画は評価できる。また、新たな研究組織体制である「デパートメント制」の実施においても、成果創出までに時間がかかるもののユニークで価値のある潜在的な研究を中長期的な視点で評価するなど、多様な視点での研究評価軸を設計している点は評価できる。
- ✓ 医学系研究科や附置研究所も含めた全学で、閉鎖的な部局小講座制から、研究領域を基本単位とするオープンなデパートメント制へ移行する意欲的な計画であり、学内合意がとれている点も評価できる。一方で、各デパートメントの研究力強化戦略等の検討の基となる京大ビジョン（全学計画）の策定や全学でのデパートメント制への移行は途上である。
- ✓ 歴史や伝統のある大規模な大学として、一定の改革の困難性がある中で、今回極めて挑戦的な改革構想を掲げていることを高く評価したい。
- ✓ 1期10年で実施する既存組織の変革においては、更なるスピード感及び、各デパートメントの構想・戦略等の明確化が必要である。また、長期的な変革を成し遂げるために、変革への取組を持続的・継続的に推進することができる体制の構築を期待する。
- ✓ 下線の事項は体制強化計画の開始に当たり重要な確認事項であり、これらについて、認定候補大学としてアドバイザリーボードとの対話を踏まえながら最長で1年間計画を磨き上げ、対応状況をアドバイザリーボードとして確認した上で、認定・認可の手続へと移行するべきである。その際、対応状況が不十分であった場合は、助成額を減額して計画を開始することも検討の必要がある。

③東京大学

【申請の概要】

- ✓ 東京大学は、変革を阻んできた旧態依然の構造を打破し、国際競争力と自律成長力

を持つ大学に自己変革する。10年で世界トップ10研究大学となり、学術と社会イノベーションを牽引する。文化・経済のグローバル交差点であるアジア・東京に位置する開かれた大学として、分断を架橋し、新たな価値創造で世界に貢献する。

【意見】

- ✓ CFOの下、事業・財務戦略の考え方や具体的な計画の検討が進みつつある点は評価できる。また、工学部を中心とした二つの新学部の設置、改革の駆動力となり得る新たな人事構想を含めて、国際競争力と自律成長力の強化に向けて、初回公募から検討が進んだ改革構想は評価できる。歴史や伝統のある大規模な大学として、一定の改革の困難性がある中で、今回極めて挑戦的な改革構想を掲げていることを高く評価したい。
- ✓ 中でも、知の集積を生む全学共通インフラである「Global Research Integration (GRI)」の導入や、全学組織に新陳代謝を行うことを目指した学術経営本部による評価・資源配分という考え方は、全学を巻き込み、大学が自律成長を行うための意欲的な計画として評価できる。他方で、全学の共通理解を基盤に、これらを実際に運営できるか、計画の実現性をアドバイザリーボードとして確認することが必要である。具体的には、来年4月までの設置を目指す学術経営本部が実施する資源配分と連動した学内組織評価や、プロボストとCFOを軸とした新体制の下での全学の資源配分の際の基準について、学内合意を経た上で、実効性の確認が必要である。
- ✓ また、コンプライアンス上の問題に対する法人組織としての対応は、国際卓越研究大学に求められている自律と責任のあるガバナンスの構成要素として重要である。大学運営に関し執行部が部局とより一層一体としての判断・責任を負う、法人としてのガバナンス体制に移行することを通じて、世界トップレベルの研究大学に飛躍することが強く求められる。
- ✓ 下線の事項は、体制強化計画の実行可能性の担保の前提であり、認定候補大学とするに当たり確認が必要である。そのため、最長で1年間審査を継続し、下線の事項を確認の上、認定候補大学としての採否を決定する。なお、継続審査中に、法人としてのガバナンスに関わる新たな不祥事が生じたと判断された場合、審査を打ち切る。また、仮に採択された場合であっても、助成額の調整は必要である。

④大阪大学

【申請の概要】

- ✓ 最先端の研究を基軸に、総合知を創出する体制強化を行い、若手研究者の独立性を尊重し、創発的研究を推進する。さらに産学連携と社学連携を両輪として研究成果を社会実装し、産業・社会変革を先導する。多文化共生の時代にも地域と共に歩み、世界に先駆け、「いのち」と「くらし」を守る未来社会実現に貢献する大学となる。

【意見】

- ✓ 大阪大学が中心となり、地域一体型の国際的な知の創造と人材育成のための拠点を構築する「大阪・関西サイエンスヒルズ構想」は、これまでの実績に基づく産業界や自治体との連携強化という点で期待され、強固なパートナーシップを活かした提案であり評価できる。一方で、既存の産学連携の取組を飛躍的に発展させた新たな

産学連携の取組や、関西地域を越えて世界と繋がる取組について、より一層の具体化が必要である。

- ✓ 研究者組織の再構築、若手研究者が躍動するための体制整備、社会や産業構造の変革に挑戦する価値提供戦略、データ駆動の意思決定体制の構築など体系的な計画であり、初等中等教育からリカレント教育まで幅広く教育改革との接続にも踏み込んだ点も意欲的である。一方で、研究者採用プロセスの改革や世界レベルの高額給与制度など8つの柱からなる新たな人事制度については、一部の制度の運用が既に始まっているが、今後運用を予定している制度についても、既存教員への適用のあり方などを具体化するとともに、全学への適用について更なるスピード感が期待された。また、免疫学等の強みとなる分野、経営企画 DX システム「ReCo[®]」や外国語学部、研究所・研究拠点など他大学にはない特色・強みを有しているが、これらを更に活かす方策についてより一層深く検討することが求められる。
- ✓ 学長のリーダーシップの下で計画実行の意欲を確認することができた一方で、財務計画策定のキーパーソンとなる CFO の配置はこれからであり、今後のガバナンス体制の具体化が求められる。
- ✓ 大学の持続的な成長に向けて、研究力、事業・財務戦略、ガバナンスそれぞれについて意欲的な検討に敬意を示すとともに、本制度以外の支援も模索しつつ、改革を着実に具体化することを期待したい。

⑤早稲田大学

【申請の概要】

- ✓ 建学の精神のもと、世界人類に貢献する社会的インパクトの高い研究を推進する国際競争力とグローバル・インターフェイスを持つ研究大学を目指す。その実現のため迅速な意思決定を行うガバナンス体制と強固な財務戦略を整えた。これらにより、新設した Global Research Center を司令塔として文理融合と産学連携の先端研究を推進する。

【意見】

- ✓ 研究の司令塔として創設された「Global Research Center」の下、世界人類に貢献する社会的インパクトを意識し、文理の壁や分野を越えた連携を実現するとともに、理工系の研究力の強化を目指す意欲的な計画である。また、データサイエンスの進展に伴い、今後自然科学系及び人文・社会科学系の研究も含めデータ活用により社会や研究のあり方が大きく変動することが予見される時代に、AI 技術の活用方法に関する実践的な教育や、研究の加速にも踏み込んだ先進的な計画である。
- ✓ 多様な大学出身者が参画するなど、学内外の連携を強化し、スタートアップの創設・育成に取り組んでいる点が確認されるとともに、これまでに構築した強固かつ広範な海外ネットワークや海外からの留学生受入れの経験も活かしつつ、オープンかつ多様な環境の下で、研究者や学生の国際頭脳循環を更に発展させる具体的な計画など、総長のリーダーシップの下、研究大学として国際競争力向上の意欲的な検討がされており評価できる。
- ✓ 一方で、速いペースで理工系人材を増員する計画であるが、計画上のペースで増員

し、かつ質を担保できるかについての懸念が払拭できなかった。また、理工系の研究力強化を目指す意欲的な計画であるが、強みを有する人文・社会科学系の活かし方も含めて、研究力強化に向けた一層の検討も期待された。多くの学生を有し、我が国の人材育成の観点でも重要な役割を担う大学の一つであり、世界を先導し変えていく人材の育成に期待したい。

- ✓ 大学の持続的な成長に向けて、研究力、事業・財務戦略、ガバナンスそれぞれについて意欲的な検討に敬意を示すとともに、本制度以外の支援も模索しつつ、改革を着実に具体化することを期待したい。

⑥九州大学

【申請の概要】

- ✓ 「イノベーションとビジネス創造の中核となる」
「卓越したフロンティア科学を総合知で創出する」
「強靱かつ柔軟なガバナンスを実現する」
そのために、「5つの壁-学術分野・距離・組織・職位・博士像-」を越えて総合知で社会・学術インパクトを創出し、世界と伍する「アジアから未来変革を牽引する大学」へ飛躍する。

【意見】

- ✓ 社会課題を設定し、学術分野を越えて多様な専門性を持つ研究者の結集を行う全学的なフレームワーク「Social Impact Framework (SIF)」を中核としつつ、研究支援体制やガバナンス、事業財務基盤の構築などを通じて、分野や組織など5つの壁を乗り越え、社会インパクトの創出を目指し、アジアから未来変革を牽引する大学への変革の期待は大きい。
- ✓ 一方で、国際的な競争環境の中で人材獲得や投資の呼び込み等を行うという観点で、大学の強みを活かした差別化の戦略と、多数の教員が所属し自由闊達な研究活動を保証するフレームワーク（Academic Impact Framework）が、世界に伍する研究大学としてどのように卓越した研究を創出し続けるかについて更なる戦略の具体化が期待された。また、研究力強化・人材育成等の観点から、大学における教育との接続についても、より一層の検討が期待された。
- ✓ また、距離の壁を越えて地域や世界と協働し日本のシリコンバレーを実現するという構想は、地元企業や産業との関わりという観点で期待が大きい。九州を起点とした日本の成長エンジンを目指す上での自治体との連携の強化、人材育成の観点からの他大学との連携など、インパクトある改革の実現に向けた道筋の更なる具体化や国際的な連携の検討が期待された。
- ✓ 大学の持続的な成長に向けて、研究力、事業・財務戦略、ガバナンスそれぞれについて意欲的な検討に敬意を示すとともに、本制度以外の支援も模索しつつ、改革を着実に具体化することを期待したい。

⑦筑波大学

【申請の概要】

- ✓ 大学改革を先導してきた筑波大学は、学理を創成する未来構想大学へと自らを変革する。筑波研究学園都市の産学官の研究機関とともに研究教育共創体となり、国際性と学際性を両輪に、組織間、学問分野間の壁を越えて生み出される新たな価値をスーパーシティ型国家戦略特区で実装し、固定化された社会の変革を牽引する。

【意見】

- ✓ これまで日本の大学改革を牽引してきた大学であり、筑波研究学園都市の研究機関を結集した研究教育共創体として、知の創造に繋がる産学官の研究と次世代人材育成を共同して行う「Tsukuba One Campus (TOC)」について、その構想は魅力的である。一方で、筑波研究学園都市の各研究機関との連携・協業の戦略やその対象範囲、構想の実現に向けた道筋には、初回公募時点からの進捗を踏まえても、実効性に懸念が残った。
- ✓ TOC を機関間の共同研究や人事交流の枠組みに留めることなく、世界のトップ研究者を惹きつける構想とするには、諸外国の事例も参考としながら、TOC として人事の一体的な運営に向けた道筋を参画機関との間でより一層明確化することが求められる。加えて、そうした連携を筑波大学が中核機関として先導することの実現可能性を高めるとともに、TOC という新たなモデルケースとなる枠組みがつくば地区を越えて全国に波及することも期待される。
- ✓ また、TOC のような所管省庁をまたぐ大きな構想を実行するためには、長期的に変革を推進する必要があるため、関係省庁による支援とともに、長期的視点に立った組織としての推進力と意思決定の一貫性が確保されることを期待したい。
- ✓ 大学の持続的な成長に向けて、研究力、事業・財務戦略、ガバナンスそれぞれについて意欲的な検討に敬意を示すとともに、本制度以外の支援も模索しつつ、改革を着実に具体化することを期待したい。

⑧名古屋大学

【申請の概要】

- ✓ 全教員の PI (Principal Investigator) 化と PI の自由闊達なグループ・クラスター形成への戦略的支援等により、大学を取り巻くあらゆる壁を取り払う。研究分野・組織を超えて PI 同士を繋げ、視野が広い学生を世界と繋げ、教員・博士人材を社会と繋げ、知の価値化エコシステムを確立、世界最高水準のインパクトを創出し続ける新しい大学となる。

【意見】

- ✓ 個を尊重するとともに、部局等の壁を越えた連携を行う丁寧な大学運営や、研究大学として必要な改革が偏りなく検討された計画は評価できる。また、改革の柱であり、研究者が独立した PI として分野を越えて自由に繋がり共創する仕組みである「グループ・クラスター」の導入による研究力強化戦略には期待が大きい。各研究者の自由な発想に基づくボトムアップの提案に加え、未来社会創造機構や国際高等研究機構を通じた資源配分等による戦略的な組成も行われるところ、その詳細設計や、外部の若手研究者を惹きつけ巻き込んでいくための戦略など、更なる戦略的な作りこみが必要である。また、全体的に大胆な拡張計画となっており、若手

研究者比率などの KPI の実現可能性に懸念が残された。

- ✓ 東海経済圏において、産業集積地に立地している強みを活かし、産業界との強力なパートナーシップを組むとともに、優秀な人材の輩出に貢献していることから、産業界からの更なる支援のポテンシャルを有する大学である。一方で、世界に伍する研究大学としては、更に東海地域を越えて、我が国全体の学術ネットワークを牽引していくための取組の検討が期待される。
- ✓ 東海地区の大学を取りまとめてスタートアップ教育や起業支援を行う「Tongali」プロジェクトの展開や、アントレプレナーシップ教育を必修化するなど着実な取組は評価できる一方で、更なるスピードアップや、VC を糾合するプラットフォーム形成など、更に効果的な事業・財務戦略の検討も期待された。
- ✓ 大学の持続的な成長に向けて、研究力、事業・財務戦略、ガバナンスそれぞれについて意欲的な検討に敬意を示すとともに、本制度以外の支援も模索しつつ、改革を着実に具体化することを期待したい。

4. 結論に至る考え方

初回公募においては、東北大学から、変革への意思とコミットメントを伴い、野心的でありながら具体的な戦略を伴った体系的な計画が示され、改革の理念が組織に浸透していることも含め非常に高く評価し、選定するに至った。今回の公募では、初回公募でも申請があった8大学から申請を受けた。各大学の提案は、初回公募時点から学内での精力的な議論を経て、更に深く検討が進められ計画の水準の大きな向上が見られており、アドバイザーボードとして、各大学の改革への意思と真摯な検討に敬意を表したい。一方で、どの大学も、自大学の提案を実現していくため、今後解決すべき中長期的課題を抱えており、世界に伍する研究大学を実現するために各大学の計画にアドバイザーボードがどのように関わっていくべきかという観点も含めて検討し、今回の結論に至った。

東京科学大学、京都大学、東京大学については、国際的に卓越した研究の展開及び経済社会に変化をもたらす研究成果の活用が相当程度見込まれた。また、世界トップレベルの研究大学の実現に向けた体制強化計画において、自大学の強みや抱える課題を踏まえつつ、諸外国のトップレベル研究大学と差別化する戦略を説得力ある形で精緻に提示しており、「2. (2)」に記載した審査の主要観点等も踏まえ、研究力や研究環境等における国際性や卓越性、事業・財務戦略の実効性、自律と責任のあるガバナンス体制、全体を通じた戦略性など、国際卓越研究大学として支援を受けること又は支援を検討することがふさわしく、世界最高水準の研究大学の実現を期待できると判断した。一方で、体制強化計画上の構想の実行可能性の観点から、確認の方法や必要性の程度は異なりながらも、3大学いずれについても更に確認を要する点があると判断した。「3.」に記載した、3大学それぞれに対する確認事項や確認時期については、これまでの審査を通じて認識した大学ごとの状況を踏まえ、世界最高水準の研究大学の実現に向け、各大学の改革の実効性を高め、長期的な成長を後押しするために引き続きアドバイザーボードが前向きに関わっていくべきと判断された内容等である。

5. 最後に

- ✓ 今般、国内で高い研究力を誇る8つの大学から本制度への申請がなされた。各大学がそれぞれの歴史や伝統、強みや特色を改めて見直し発展させ卓越した研究大学へと飛躍するための抜本的な改革を進める上で、本制度への申請に至るまでの意欲的で真摯な検討過程と選考過程でのアドバイザリーボードとの対話が大きな役割を果たしており、我が国の研究大学の改革意欲と将来像の検討を前進させたという点においても、本制度には大きな意義があったものと確信している。
- ✓ 令和8年4月から体制強化計画を開始する東京科学大学においては、国際卓越研究大学として機能拡張を推進する中で、国際的な切磋琢磨を通じて研究力を向上させるという緊張感を持ち、自ら策定した体制強化計画を着実に実施いただきたい。研究環境の充実や、優秀な人材の育成を促し、知的価値創造の好循環を形成することにより、我が国の、そして世界の学術研究ネットワークを牽引し、イノベーション・エコシステムの中核的役割を果たし、世界から先導的モデルとみなされる世界最高水準の研究大学の実現を図っていくことを強く期待する。
- ✓ 体制強化計画の期間は最長 25 年間としているが、潤沢な大学独自基金の造成には一定の期間がかかるとしても、諸外国のトップレベルの研究大学がより早い段階で変革を行ってきたことを踏まえれば、我が国の大学の変革は、25 年かけるべきものではない。特に、昨今の諸外国の研究大学の急速な成長も踏まえれば、時間軸を明確に定め、マイルストーンを設定し、可能な限り早期に目指す姿を達成することが求められる。
- ✓ 全ての申請大学において意欲的で考え抜かれた計画が提出されている一方で、それぞれに一定の課題があることも確認された。今後計画を磨き上げる京都大学及び継続審査を行う東京大学については、各確認事項の状況をアドバイザリーボードで確認し必要な助言を伝えていくこととなるが、これらの大学がアドバイザリーボードから体制強化計画開始が適当と判断され、計画を開始した場合も含め、国際卓越研究大学については、アドバイザリーボードとして、モニタリングにおいて、大学が設定するマイルストーンを踏まえつつ体制強化計画の進捗を確認し、必要な助言を当該大学に伝えることで、当該大学の改革を支援していくこととする。その際、各大学が設定した、体制強化計画開始後3年間の具体的な実行計画の進捗を、アドバイザリーボードとして確認することが必要である。
- ✓ 磨き上げや継続審査の状況如何においては、一定割合を減額した助成額で計画を開始しつつ、マイルストーン評価等において計画の進捗を確認し、真に各大学の改革が進んだと見られる段階で助成額の在り方を検討するなど、計画の実効性を高めるための制度設計を工夫すべきである。
- ✓ また、申請大学から提案のあった規制緩和要望については、各大学の研究力強化を着実に進めていく観点から、大学と制度を所管する官庁等との対話を通じて、具体的な内容や必要性を確認できたものから、順次、対応することを政府に求めたい。
- ✓ 今回、認定候補等とならなかった大阪大学、早稲田大学、九州大学、筑波大学、名古屋大学においても、世界最高水準の研究大学の実現を目指し、意欲的な提案があったことを高く評価したい。各大学における精力的な検討のもとに、各々の研究力

や地域性などの強みや特色を活かし、既に取り組み始めている若手研究者の育成や研究時間の確保のための業務分担の設計、また、大学の有する知的資源の価値化等への取組などを各段に高度化、また成長させる事業・財務戦略を練り、そういった取組を支えるガバナンスが整えられつつある状況であることを確認した。これらの大学では、例えば、

- 国にとって重要な分野における基礎研究から社会実装までを視野に入れた組織対組織の大型産学連携によるイノベーション創出
- 研究成果の社会実装に不可欠な経営などの専門的な知識と経験を培い広く国内外で活躍する人材の輩出
- 日本を代表する国立研究所や他大学との新たな連携の模索
- 中小企業も含めた地域経済圏の中心として、日本の基幹産業をリードする企業群との共同研究やスタートアップの創出
- 分野横断や産学連携の先端研究の推進による、世界人類に貢献する社会的インパクトの高い研究の実現

など、高い研究力を元に、我が国の研究力強化とイノベーション創出を牽引する研究大学群の一翼を担うことが十分期待される取組の提案があった。

- ✓ 現在、我が国の研究力の向上を牽引する研究大学群の形成に向けて、国際卓越研究大学制度とともに、地域中核・特色ある研究大学強化促進事業が展開されている。今後、これまでの取組や今回の公募の結果を振り返り、改めて、我が国の研究力強化を牽引する高いポテンシャルがある研究大学がそれぞれの強みを更に伸長させ、これらの研究大学群が総体として世界と戦っていけるような支援策を講じていくことは、我が国にとって有効な投資であると確信する。
- ✓ アドバイザリーボードとしては、文部科学省が進める、研究力強化を牽引する研究大学群の形成という政策目的にとどまらず、現下の我が国が直面している研究力、イノベーション力、ひいては産業力の強化とそれを支える人材育成という国全体の課題の重要性を踏まえ、文部科学省が関係府省や経済界と共に、科学を基盤として我が国の発展をリードする高い視座を持ち、研究大学群の本格的な始動に向けて、さらに必要な取組を速やかに検討・実施していくことを強く求めるものである。
- ✓ そうした取組を通じて、日本社会の中で大学が果たしてきた役割や強みを更に伸長させ、我が国の成長の中心となり、世界で存在感を示す大学へと発展していくことを期待したい。将来的には、国際卓越研究大学に相応しい大学が増え、国内外の大学が切磋琢磨、また協創しつつ、我が国全体で、成長する大学、成長する社会が具現化していることを心から望む。